

ホップ・ステップ



第232号
2026年2月1日発行

水は善人と悪人を区別しない
そのように地域のだれとでも協力し、人々が生きることを支えていく。医師の中村哲さんのことばだ。戦乱と災害に苦しむアフガニスタンの人々を救うため、身を粉にして働いた▼ハンセン病の患者を中心に貧しい人たちを診ていた中村さん。

2000年にアフガンを襲った大干ばつが転機となつた。「百の診療所より一本の水路」を合言葉に、井戸掘りや水路づくりへ軸足を移す。まるつきり畑違いの分野であつた▼重機や資材が十分なわけではない。技術や資金もそうだ。手本にしたのは日本の伝統的な農業土木技術だつた。たとえば水路の護岸には針金の蛇籠(じやかご)を使う。

かごに石を詰めた蛇籠を使う。現地の人も補修しやすい手近な素材だ。長持ちさせる工夫である。

▼中村さんは6年前のきょう凶弾に倒れた。自分の仕事で残るのは用水路だけだろう。生前にそう語っていたというが、医療支援を含め志を受け継いだ人がいる。



1月号で新年の初めには今年は何々しようとか、こうしたいとか色々な目標を持つたと思います。が、あつという間に1月が終わりました。思い描いたとおりになつてているでしょうか。皆さんは近い将来社会に出ていくことになります。今は学校も社会も色々な問題を抱えどんどん複雑になつてきています。様々な価値観を身に着け社会に貢献できるような人になつてほしいと思います。

作家の高嶋哲夫氏は「才能は平等ではないが、才能の種類は無限にある。勉強やスポーツだけでなく、優しさ、器用さ、根気強さ、人の話を聞く力、人を楽しませる力など、これらも立派な才能である。しかし、現状の教育は「均一な優秀さ」「偏差値礼賛」を求める

▼苦労は実を結んだ。砂漠化した土地が見渡す限りの麦畑へ変わっていく。避難民が次々に戻ってきた。家族とともに3度の食事をして穏やかに暮らす。人々のささやかな願いをかなえる大仕事だつた。

▼「狂気のよくな世界情勢の中でこそ正気を対置し、人と人、人と自然の和解と共存を説く」。いまさに大切にしたい中村さんの理想である。

釧路新聞 卓上四季 25・12・4



1月4日からの冬期講座のようすです。(上・下)



1月10、11日の道コンのようすと12日の見直しのようすです。



1月17日から毎週土、日曜日に計8回の入試直前ゼミ



1月30日 道コンの結果を踏まえて面談しました



34期生で高専1年生の野崎偉太郎君が2年生になるにあたつて学科選択の相談に来ました!

19期生でJR釧路運輸車両所に勤務する浦田誠也君が2年ぶりくらいに顔を出してくれました! 差し入れのミスドを持って。

31期生で江南出身の八巻心花さんが1年間のアルバイトを経て京都芸術大学に合格したことを報告に来てくださいました。差し入れも沢山。

沢山の差し入れありがとうございました。

仕組みとして設計してきた。これは高度経済成長期には有効だった「発展途上国型教育」であり、個性と創造性が価値を持つ現代には不向きではないか。その結果、子どもは自分に魅力を感じず、不登校が増える原因の一つとなるのではないか。その結果大学や企業など、社会全体に早期退学・早期退職の連鎖が生まれている。学校が「自分を知るための場」でなくなり、「偏差値を上げ」「国の中準に合わせる競争の場」と化してしまったからである」と言っています。日本が世界から30年遅れているといわれる最大の原因是教育にあると思います。医者が重機を操作し砂漠を緑の大地に変えた中村哲先生のように皆さんも自分の出来ることで社会に貢献出来る人に!

28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日
在籍する生徒の所属校	高校	中学校	小学学校	青陵・美原・景雲・春採・富原・別保																							

携帯・スマホ持ち込み禁止!

過保護・過干渉は子供をダメに!

高専入試まで7日!

高校入試まで31日!

2月の予定

福島原発の廃炉ロボコン 高専生が競う 社会課題に技術で貢献 高専に任せろ！

廃炉創造ロボコンに参加した学生たち（2025年12月、福島県楢葉町）

東日本大震災の東京電力福島第1原子力発電所事故に伴う廃炉作業を想定した、高等専門学校（高専）生のロボットコンテストが2025年12月に10回目を迎えた。人が入れない廃炉作業のロボットには高度な設計と制御が不可欠で、ものづくりの知識と技術を学ぶ高専生の柔軟な発想は有用だ。長い道のりとなる廃炉への高専生の関心も高めている。



廃炉創造ロボコン、第10回は国内外18チーム参加

25年12月20日、日本原子力研究開発機構・楢葉遠隔技術開発センター（福島県楢葉町）は高専生の活気であふれていた。普段は廃炉関連ロボットの試験などが行われる屋内施設で、観客に見守られながら全長170センチメートルの蛇のような細長いロボットが動いていた。



熊本高専Bチームのロボットが階段に沿って移動する様子

熊本高専5年生の財津太一さん（20）らのチームが製作したロボットは、「関節」と呼ぶ8カ所の可動部分があり、上下や左右に自由に動ける。生き物のように器用に階段を下りる様子に観客から感嘆の声が漏れた。

10回目を迎えた「廃炉創造ロボコン」は、福島第1原発での廃炉作業を想定した課題に対し、高専生がロボットを製作して競う。9回で延べ139チームが参加した。今回は福島など10高専15チーム、3高専の連合チーム、マレーシアとタイの2チームが競った。

課題は廃炉作業などに合わせて変わり、今回は原子炉格納容器の内部調査を想定。ロボットは直径約60センチメートルの配管内からスタートした後、下に伸びる60度の急勾配の階段を下る。階段から数メートル先にある堆積物に見立てた小さなブロックを回収し、スタートから10分以内に戻れば成功となる。

廃炉作業では格納容器に人が立ち入ることはできず、ロボットは遠隔操作となる。ロボコンでも機体に取り付けたカメラやセンサーを頼りに操作する。映像などを頼りに操作する状況判断力も問われる。



茨城高専の学生が遠隔でロボットを操作する様子（観客席にあるモニターを撮影）

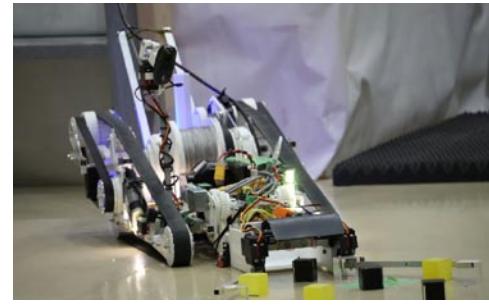
実際の現場と同じようにロボコンでも思わぬ故障が発生する。旭川高専は前回大会で優秀賞を獲得したロボットの改良機で挑んだが、電気系統のトラブルが原因でロボットが動かなかった。ロボコンは競技を通じて、技術の改良を重ねていく向上心にもつながっている。



親機の前方を照らすライトが特徴的な小山高専のロボット

前回最優秀賞だった小山高専は、タイヤが6輪のロボットで参加した。多くのチームはベルト状のクローラー（履帯）駆動ロボットだったが、機動性を重視してタイヤ駆動を採用した。

廃炉内で電子部品が壊れやすいことを想定して部品数も少なくしたが、課題はクリアできなかった。関口碧さん（19）は「来年はロボットをもっとパワーアップさせて挑戦したい」と涙をこらえて語った。



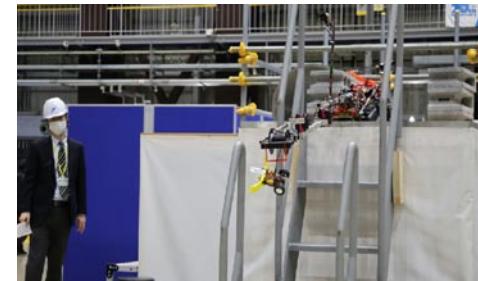
舞鶴高専のロボットが堆積物を回収する様子

卒業後に廃炉作業に関わる参加者も

舞鶴高専は、子機を活用し俯瞰（ふかん）でロボットの動きを把握する仕組みでアイデア賞を受賞した。階段の上から子機が撮影し、堆積物の位置を正確に把握して回収したが、制限時間内に戻ることができなかった。「全国の高専生が廃炉に興味を持ってもらうためにどうすればよいか。高専といえばロボコンだった」。立ち上げメンバーの一人、福島高専の鈴木茂和教授は振り返る。会場では地元の小学生も観戦していた。

福島第1原発の廃炉は51年の作業終了を目指すが、核燃料（デブリ）の撤去作業などは滞っている。長い道のりとなる廃炉にとって、ロボコンは次世代の技術者育成に貢献している。

卒業後、東京電力グループでデブリの取り出しなどに携わる大会参加者もいる。鈴木教授は「大学の原子力系の学部に編入するなど、10年間で数人は原子力関係に就職・進学している」と語る。



長い鼻のようなアームが特徴的なタイ高専のロボット

社会に役立つロボットに挑戦

課題をクリアしたのは、タイ高専（KOSEN-KMITL）のみだった。象の鼻のように長くなる折り畳みのアームを使って堆積物を時間内に回収してゴールした。

「社会に役立つロボットにチャレンジできる」。旭川高専3年生の辻本純平さん（18）は廃炉創造ロボコンの魅力をこう語る。熊本地震などで被災した熊本高専の財津さんは「困っている人がいるなら、自分が得意としているロボットの分野で貢献したい」。自ら手を動かしロボットをつくり、操作することの意義を多くの学生が得ていた。

技術と知識競うコンテスト、企業も注目

10代後半の5年間（商船高専は5年半）に実践的、創造的な理系教育を徹底的に学べる高専。学びの成果を競う様々な内容のコンテストが1年を通じて開かれ、高専人材を採用したい企業の注目も集めている。

10～11月には土木構造物や都市計画のアイデアを競う「高専デザコン」や、プログラミング分野の「高専プロコン」が開催される。「高専生の甲子園」とも称される「高専ロボコン」の全国大会も開かれる。

ものづくりの技術と人工知能（AI）を組み合わせたビジネスプランを競う「高専DCON」では参加者による起業が各地で相次ぎ、高専出身者に地域経済を支える期待も高まっている。（太田聖哉、佐藤杏奈）

日本経済新聞 2026年1月14日



AWS ジャパンが旭川高専・富山高専と連携

AI 人材育成で地域創生を支援

アマゾン ウェブ サービス ジャパン合同会社（AWS ジャパン）は、独立行政法人国立高等専門学校機構 旭川工業高等専門学校（旭川高専）と富山高等専門学校（富山高専）とともに、地域創生に必要なデジタル・AI 人材育成に向けた包括連携協定を締結したと発表した。圓潤そり高専！